

19. Whole-body PET で FDG の高集積がみられたサルコイドーシスの一例

安田 聖栄 井出 満 高木 繁治
正津 晃 (山中湖クリニック)
鈴木 豊 (同・放)

PET はブドウ糖代謝の亢進部位を画像として検出できる。また最近の PET 装置では広い範囲の検索が可能で、癌領域での適用は増大した。今回、whole-body PET でサルコイドーシスの病巣に ^{18}F -fluorodeoxyglucose (FDG) の著明な集積が認められたので報告した。

症例は 72 歳、男性。癌検診の目的で PET 検査を受けた。FDG を 260 MBq 静注後 45 分に PET カメラ (ECAT EXACT47, Siemens/CTI) で撮像したところ、縦隔と両側肺門部に FDG の高集積が多発して認められた。CT で FDG の高集積は腫大リンパ節に一致していた。縦隔鏡下リンパ節生検を施行。病理組織では壊死を伴わない肉芽腫病変で、サルコイドーシスに一致する所見が得られた。

サルコイドーシスの肉芽腫形成には macrophage が関与するが、macrophage ではブドウ糖代謝が高いとされる。このことがサルコイドーシスの病巣に FDG が集積する理由と推測された。癌診断で FDG PET を用いる時は、偽陽性になる疾患として注意が必要である。

20. 喘息重積発作に広範な心筋 stunning を合併した一例の核医学所見

村田 治子 山科 章
(聖路加国際病院・循内)
守谷 悦男 (同・放)

症例：48 歳女性。27 歳で気管支喘息にて入院した際、陳旧性下壁梗塞を指摘されている。その後気管支拡張薬を服用中であったが、気管支喘息重積状態となり、挿管後 ICU 入室となった。人工呼吸管理とステロイド大量投与にて呼吸状態改善し翌日抜管した。その夜心電図上広範な T 波の陰転化と CK 上昇を認めた。心内膜下梗塞疑い、冠動脈造影行ったが病変なく、左室造影にて“たこつば型”壁運動異常を認めた。 ^{201}Tl シンチと ^{123}I -BMIPP シンチでは中隔に

わずかな uptake の低下を認めるのみであったが、 ^{123}I -MIBG シンチでは前壁基部を除き著明な uptake の低下を認めた。壁運動異常は急速に改善したが冠動脈の分布とは一致せず、MIBG の集積低下領域に一致し、denervation による stunning の所見であった。気管支喘息と異型狭心症の合併例はともに平滑筋攣縮によるものとして数例報告されているが、本症例は核医学検査が、心筋障害の原因としてカテコールアミンの関与を示唆した一例であるため報告する。

21. 核医学検査が有用であった左上大静脈遺残の一例

小池 繁臣 池上 匡 杉山 正人
斉藤 節 (横浜南共済病院・放)

19 歳男性。呼吸困難感あり、胸部単純 X 線にて右房の拡大が疑われた。心エコー上、心房中隔欠損、肺静脈還流異常、左上大静脈遺残等が疑われた。MRI にて左肺動脈前面に異常血管を認めた。この血管は縦隔内を下降し冠静脈洞より右房内へ流入していた。左上大静脈遺残を疑い、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA を用いて静脈をダイナミック RI として描出した。左前腕より静注すると本来の上大静脈は描出されず左上大静脈より直接右房が描出された。右前腕より静注すると本来の上大静脈が描出された。また、大循環へのシャントのないことも確認された。左上大静脈遺残の確定診断としては心血管造影が行われてきたが、発作性頻拍が高率に起こりやすいという難点があった。本症例のように $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA を用いて、ダイナミック RI を行うことによって、非侵襲的に確定診断が可能であると思われた。

22. 表在性血管病変における直接穿刺シンチグラフィ

井上 優介 百瀬 敏光 渡辺 俊明
西川 潤一 佐々木康人 (東大・放)

表在性の血管腫、血管奇形の治療に、病変に硬化剤を直接注入する硬化療法が行われる。その際の硬化剤の流出速度、拡散状況を予測するために、血管病変に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ スズコロイドを注入する直接穿刺シンチグラフィを施行した。対象は表在性血管病変を有す